

No.114 2006.10.26

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局:町田市森野3-1-12増山正子方
〒194-0022FAX042-722-1243

知恵の樹



子どもの心をたがやし 心を遊ばせる読書

— 手を伸ばせば 届く範囲に本があり、誘う人が そこに居る —

「身近に図書館がほしい福岡市民の会」代表 力丸 世一

「読書研修会」「図書館まつり」「読書フォーラム」・・・秋・読書週間で読書に関するイベントが盛んです。子ども読書活動推進法や文字・活字文化振興法が制定され、学校で、地域で、家庭で読書の大切さはかつてに比べ広く一般に伝えられるようになりました。ボランティアの活動も活発です。でも何か心もとない気がするのは私だけでしょうか？

県や市など自治体挙げ、お上からのお声掛けで行事を行い、行政・行政担当者は行事が終了段階で「取組んだという証拠」を残しひと段落。学校などでは実践教育として研究発表会を行い“やった”という証拠がためをし、ボランティアも、参加あるいは協力し肩の荷を降ろしている、といった言いすぎでしょうか。

お祭り騒ぎが終わってみるといったい何が残っているのでしょうか？ 昨年発表した学校ではその後・・・と言う検証はあるのでしょうか？ 寧ろそれが日常化するためにどこをどのように変えたか、と言うことをしっかり確認する必要があるのではないのでしょうか？

今一つ、図書館のおはなし会や、学校図書館に「来る子」は、まだいい。「来ない子」までも視野に入れなければ、道半ばではないのでしょうか？ 親

が関心を持てばその子はある程度本への関心を持ちます。全く関心を持たない親もいます。その子までも対称にしなければダメだと思います。行事などでその辺りが忘れ去られていないでしょうか？

何も国を挙げてしなくてもいい、そのかわりにもっと図書館行政をきちんと取組み、小学生でも歩いていける範囲に図書館があり、其処には子どもと子どもの本が分かる司書専門職員がいて読書への誘いをする。公共図書館だけでなく学校も同じ。学校生活の中に学校図書館が取り込まれ、司書教諭や学校司書に限らずすべての関係者が読書への関心を持つ・・・このことがより大事ではないかと思うのです。そのためにも図書館員は図書館から出ていくだけの努力をしてほしい、学校関係者は本の嫌いな子や図書館利用をしない子どもを視野に入れての対応をしてほしい、と思います。何も特別なことはしなくていい、普通に、手を伸ばせば届く範囲に本があり、誘う人がそこに居る、そのことだけでいい。

子どもは本来好奇心の塊。本の楽しさを知れば放っておいても本に関心を寄せるのです。図書館が身近にあれば図書館へも足を運ぶのです。

公共図書館や学校側だけの問題ではなく、私

たちも考えなければならぬと感じます。かつて、読書の大切さを知る母親たちは、子どもたちの本をと駆けずり回りました。どんなに遠くても子どもたちの本が借りられるならと自転車走らせ図書館から借り受け文庫活動に走り回りました。20分親子読書運動にも力を合わせ取り組みました。その時と今はどこが違うのか…。今は、国を挙げて読書への取り組みを奨励し、自治体が読書に関心を示さざるを得ない状況があり、さまざまな企画を打ち出しています。それをいかに現実問題までに引き下げるか、私たちは頭を切り替えなければいけないのではないのでしょうか？イベントが終われば潮が引くように砕け散って行くようなもろさ、「子どもへの読書活動推進」をブームにしないためにも、一人一人が原点に立ち返って「目的とする対象は誰か」「目的は何か」当たり前の事だけどこまで視点を下げる必要があるのではないのでしょうか。

私が、子どもたちにもっと本との出会いを、本の楽しさを伝えたいと強く思うようになったのは、我が子がいじめにあったことからでした。次男は中3になった時、転校しました。体格もよく成績も心配はしていませんでした。前の学校では友人も多く、まして受験を控えた中3、子どもたちの心構えも違っているだろうと安易に考えていました。ところが転校直後からいじめが始まっていました。

極楽トンボな親は、「何故この年になってメガネを割って来たりするのだろうか」「何故、ワイシャツ(制服)にボールペンで書いたりするの？」と単純に思い、「みんなと暴れていて」という子どもの言

葉を鵜呑みにしていました。

「この子たちって幼稚だね」という次男の言葉がいじめのサインだったと気付いたときには、かなり深刻な事態となっていました。真夜中になると2階から嗚咽が聞こえるようになりました。次男は唯一人いじめに立ち向かい頑張り、ついに自分を守るために学校を、先生を、級友を拒否しました。後日、前年から学校内部で教師間のいじめがあったこと、ゲーム感覚でいじめが日常的にあり、学校側も把握していたことが分かりました。

次男は生きるか死ぬかの崖っ淵に立ちながら「生」を選択してくれました。私は無力で、何もしてやれませんでした。幼い頃から本に親しみ本を通じて「ここだけが全てではない」という視点、生きる力を会得していたのだらうと思います。今思ってもよくぞ我が子を“殺さなかった”と思います。この時から私は、幼い頃から本に親しんでいる子どもは「生きるか死ぬか」という一線上に立ったとき「生きる」と確信を持って言えるようになりました。

この苦しい体験から私は、我が子だけを見ていてはだめだ、我が子だけを守っていてもダメ、我が子を守るためには、隣の子もそのまた隣の子も育てなければダメ。子どもたちの心を育てなければダメ、と痛感しました。心を育てる事、何も難しいことではありません。幼い頃から本と接し、心を耕せばいいのです。単純なことです。全ての子どもの傍に「本」があり、「本と子どもを結ぶ人」がいる、その環境を作り出すこと、原点にかえればいいのです。(福岡県在住 りきまる せい)

か*町田の学校図書館を考える会 子どもの本連続講座 < p 5～6 参照 >

3回 10月28日 (土) 1:30～3:30 中央図書館6階会議室

岡山のビデオを見た後、町田での様々な実践や課題について語りあう会です。

4回 11月25日 (土) 1:30～3:30 中央図書館ホール

「科学遊び&かんたん工作」 講師：小川真理子(科学読み物研究会) 子どもたちの理科離れが深刻な今、簡単な科学遊びなどで子どもたちに科学の面白さを伝えられたらと思います。

5回 神奈川県立川崎北高校図書館見学会 日時12月の水曜日を予定で交渉中。

書架配置や配架を工夫して、生徒に親しめる学校図書館作りを進めている司書の学校図書館です。ユニークな取り組みをぜひご覧下さい。きっと参考になります。(問：042-723-8887 水越)



シンポジウム「図書館の未来は市民の手で！」

去る10月8日(日)13:30~16:30、横浜・石川町にある「かながわ労働プラザ」に於いて、市民と図書館職員の有志による実行委員会方式での図書館シンポジウムが開催された。

〔天下分け目の「関が原・冬の陣」が始まります。千葉や、名古屋からも参加してくれます。〕

この際、横浜観光を兼ねて参加して頂けませんか？全国の、図書館の友の会の皆さん、横浜を応援してください。……〕というMLの誘いに、水越さんを誘って参加した。

主催者が予想していたよりもはるかに多くの参加者があり、たくさんの補助椅子を必要として、会場は100人を超える人？で超満員。第1部は4人のパネラーによる「図書館の未来を考えるために」。休憩を挟んで第2部に質疑応答があった。全体を通して大要を報告したい。(増山正子)

パネラー

山口源治郎さん(東京学芸大学教授)

齋藤明彦さん(前・鳥取県立図書館長)

草谷桂子さん(静岡市の図書館をよくする会)

川越峰子さん(横浜市中心図書館司書)

山口源治郎さん「転換期の図書館」

図書館の転換期は、今に始まったものではなく、60年代後半から量的側面での普及・発展から質的側面はどう深めていくかが問題提起となり、転換期を迎えているといわれてひさしい。

図書館のイメージをどう再構成、再構築するか。社会の大きな転換として、学生の意識・考え方の問題がある。利用者構造の変貌も、1980年代52%あった児童書の比率が2004年度には28.2%となり、成人の利用が3/4になるなど、子どもの利用が半分もなく中身が問われるようになった。＜正規専門職員一非職員、嘱託＞の数の比率も、80年<9,083-1,040>、05年<14,206-13,257>と専門性が移譲され、図書館の劣化が始まっている。

90年代に入ってから、社会的変化と内在的变化という2つの転換に図書館はどう対応していくのか問われている、としてその課題を挙げられた。

＜図書館は地域空間であるという考え方＞

①図書館は、インフォメーション・コモンズ(知識と情報の共有地)としての空間。情報は共有し、恵をみんなで分かち合うという公共性/②公共の地域空間(思想の広場)とフォーラムとしての性格。議論・発信することから、共有し、何かを作っていく、まちづくりの可能性として図書館を組み入れていくという発想/③人々の生き方を支援する課題解決型の図書館。商品を並べるだけでなく、地域に密着したサービスを打ち出すこと。便利さから生活要求利用をつかみ御用聞きまで始めたコンビニの変貌を例にとって話された/④図書館政策・行政の課題を議論

市民と図書館の関係性をどう共に作っていくのか、地域と図書館がどうイキイキするか、街づくりプロセスを作る事からはじめていく。納税者としての作り手として我々の図書館はこれでいいのかどうか、2007年問題を、よろこそ図書館へということになるかどうか、若者に働く支援をしていけるかどうか……。

齋藤明彦さん「『役に立つ』図書館が地域を救う～鳥取県立の図書館をプロデュース～」

地方分権・自己責任の時代になり、情報を発信する図書館の役割が重要になった。図書館はインターネットと違って一箇所で網羅したレベルの高い情報をもらえ、情報弱者を支え、身近で高い能力で資料提供するところである。文科省も、公民館重要視から図書館を見直している部分がある、といわれる。

図書館は一般的に、趣味・娯楽・子どもの本・高齢者の余暇のためにあり、今働いている人には必要ないというイメージが強い。財政が逼迫すると、行政でも家庭でも趣味的だと思ふものから切っていくことからも、図書館はそのターゲットになり易い。そのため新しい「役に立つ」事業の集中的展開を図り、地域住民行政へのアピールを図る必要がある、という。

鳥取県民60万人うち7万人が図書館へ来て40万冊の利用がある。図書館を利用しない住民の方がずっと多い。図書館はあなたのためになりますよ、あなたを支えますよ、と住民にアピールし専門性を意識させる戦略を練ることから始められたとか。鳥取県立図書館は、高い専門性で成り立っており今やガリバー敵存在。委託、指定管理者になると地域の中の活力を失わせるということ、県知事はじめ議会が判

断し、委託をしない直営でやっていくとH14年4月に決めた。図書館にはどういう人的資源がありそれをどう活用するか、予算、行政のニーズで今どういう動きをしたらいいのかを考えた場合、直営の方がずっとやりやすいという。マニュアルに書けるものは委託で出来る、マニュアルに書けない問題点を見つけて解決していくことで手ごたえを感じ、モチベーションを上げる。見てもらい、直営が大事だと言うことを分からせる。委託は業務上、命令系統が二つに分かれるし、庁内連携が難しくなる、と、外に向かって図書館の働きをPRすることの効用を力説された

草谷桂子さん「市民の望む図書館 —静岡市からの発信—」

市長との会見内容、これまでの経過などの膨大な資料「図書館と指定管理者問題を考えるための資料集」を配布して下さり、発言された。

静岡市教育委員会が、市立図書館に指定管理者制度を導入しようとした時、「静岡市の図書館をよくする会」が中心になり、マスコミを動かし、議会を動かし導入を中止させた。その中核で動いた草谷さんは、25年前からはじめた家庭文庫が図書館運動の原点となり、図書館運動をしていけば何もしなくてもよい、という思いで運動を続けて来られたとか。図書館はあらゆる中立の資料を集め提示し、判断するのはあなたですと提供してくれる知の森である。そして、図書館は売れない本でも揃えてくれる出版文化を支えてくれるところでもあるとし、図書館を知ってもらうために、図書館職員とたくさんのことをしてこられたという。

図書館に関心のない人を惹きつけるために作家を呼んで、常に180人は参加する講演会を催し多くの人を巻き込み裾野を広げる努力、おはなし会やブックスタート事業の応援など、長い間の協働の歴史がある。それゆえ、指定管理者制度を試験的に導入するという話を持ち上がったとき、図書館の発展を阻むものであってはならない、民間の利益のためには協力しないという声が仲間たちの間から上がったという。

静岡市は、正規職員68人その内19名が司書資格を持っており、73名の嘱託がいる。頑張っている司書の顔が見える。指定管理者になったら困るというさまざまな問題点が出てきて気になり、あるべき図書館像の議論をすることが大事と、遠くを見るのと足元を

耕していくことで世論を作っていた。それは、図書館とはどういうものであるかというPRにも繋がった。

議員会へのロビー活動、マスコミ対策、MLでの情報、その中でも図書館協議会の頑張りがあったと評価する(草谷さんは県立図書館協議会副会長)。協議会が答申を出し、市長との懇親会を行い、つながるルート(メール上でも見られる新聞—リンクすると詳しい情報がえられるようになっている)を発行。今日のシンポジウムに、静岡県立の振興課長さん、清水中央図書館館長さん、市内学校司書の方も共に参加されているとか。対決姿勢ではなく、よく調べ議論し意見を述べ一緒に考えて行きましょうというスタンスを取った結果、こうした状況が成立するのだろう。

シンポのコーディネーターでもある川越峰子さん 「横浜の図書館の今、これから」

政令指定都市横浜市の特質、人口360万人という大都市に50年に1館、その後20年間で18館出来、1区1館が突破できないということ、各区の図書館は、地域館、分館としての位置づけであるということ、35県自治体中27位という経常収支比率に、財政上厳しいということを実感したことから話された。

それでも横浜市の図書館行政はよく頑張ってきた、と評する。毎年司書を採用し、役所の職員に向けてのサービス、レファレンスを受け付ける、仕分け業務、広告を取るなどの努力をして資料費も守ってきた、横浜市のやり方を悲観していない。これまでの導入事例は、図書館行政の低いレベルの自治体であって、横浜市には指定管理者制度の導入はないと言い切った。図書館には投資が必要、世の中の要求は非常に多く厳しいが、使ってもらえるよう整理し、利用者の手の届くように励みたいと、自らを奮い立たせるように発言され、図書館員の気迫が伺えた。

指定管理者制度、カウンター委託業務に移行していこうとする中で、横浜市は市民団体の代表をメンバーにいれ傍聴可能な「横浜市立図書館のあり方懇談会」を来年3月末まで、5回ほど開き今後を考えるという。会場からは、横浜市民からの危機感が聞かれ、職員である川越さんとの温度差を感じたが、こうしたシンポジウムを企画する中心に、市の図書館職員が関わっているということに希望が湧いてくる。

町田の学校図書館を考える会

「子どもの本」連続講座 **報告**

第1回 9月23日(土)午後1:30~3:30

中央図書館 6Fホール

『ブックトークを楽しもう 授業でのブックトーク』

講師: 丸山英子さん (狛江第3小学校司書)

今年も「子どもの本」連続講座が始まりました。第1回目は、狛江市小学校のベテラン司書をお招きしてブックトークをする際のコツやヒントを教えてくださいました。ブックトークの大事な点についてお話いただいた後、ブックトークをするのにちょうどいい20人程の参加者が子ども役になって、低・高学年2種類のブックトークを楽しみました。

大事な点 どうつなげていくか、本の順番が大事。ぶつ切れにならないように、子どもたちによく伝わるように心がける。

準備は、①テーマを決める ②本を探す (いろんな分野から) ③展開を考える ④シナリオを作る ⑤ブックリストを作る ⑥練習をする ⑦実践

公共図書館と違ってお客が限定できるので、学年・クラス、学習している事などを考えリアルタイムなテーマを選ぶ。

低学年向き 「おいしい秋み一つけた」

みなさん、こんにちは。この前公園に行って何か拾ってきたよね。(どんぐり!) どんぐりを拾ったままにしておくとうどうなるか知るのにちょうどいい本があるのよ。

『どうぞのいす』(ひさかたチャイルド) を読み聞かせで紹介。

ろばさん、不思議がってたよね。どんぐりって、栗のあかちゃん? どんぐりって何だろうと思って探しているときとてもいい本がありました。『どんぐりノート』(文化出版局)「どんぐりで作ってみよう」や「どんぐりを食べてみよう」

というページを紹介、お父さんやお母さんに見せて一緒に作ってもらおう。他に『おおきなおおきなおいも』(福音館)『ざぼんじいさんのかきのかき』(岩崎書店)の一部を読み聞かせ、「あとはどうなるかは、本を読んでのお楽しみ」、と締めくくって終わった。

高学年向き 「米・こめ・コメ」

先日田植えをした感想を子どもたちに聞く。お米だったらこの本は抜かせませんと紹介したのは『お米は生きている』(講談社)。

クイズを取り入れて米作りへの関心を深めさせる。ちょっと厚い本だけど、字の大きさはまあまあだし日本人のことが書かれているので読み易いよ、今まで難しい本が読めなかった人はこれが記念すべき1冊になるでしょう、とさり気なく薦めていた。

お米をどうやって作るかがよくわかる絵本があるので読んでみるねと『おいしいおにぎりをたべるには』(小学館)、『アイガモ家族』(ポプラ社)、『モンゴルに米ができた日』(金の星社)と続け、最後にお米の話の昔話を読むね、と『こめんぶくあわんぶく』(ほるぷ出版)を読み聞かせる。

<質問>

①本の作者の紹介は?— 基本的に表紙を見せてタイトルを言うときに作者も紹介する。裏表紙まで見せるのも大事。②複本は用意するのか?— 公共図書館などから借りてすぐ貸し出せるような状況を作るのが大切。③『ざぼんじいさんのかきのかき』は1年生には難しくないか? 文字の大きさや量はどうか考えた方がいいのか?— 個人差があるので学年は意識していない。難しかったら親や先生に読んでもらえばいい。④人数は?— 20~30人のクラス単位がやり易い。肉声の届く範囲が良い。⑤小道具などは?— あまり使わない。本をこのままの形で紹介したい。⑥ブックトーク後に本を展示するか?— 大抵ほとんどの本を子どもたちが借りていってしまうのでなかなかコーナーを設置することができない。⑦低学年だと本の一部を紹介した時続きが知りたくて次の流れにのれない子どもがいるのでは?— そういう経験は無い。「えーっ」とは言うが次の話を始めるとそちらに注意が向いてくる。⑧資料の集め方は?— 学校図書館の本は頭に入っているのでそこから関係あるものを選ぶ。インターネットで関連本を探したり、ブックトークの実践記録なども参考にする。⑩時間と冊数の兼ね合いは?— 次々と紹介するのは目が回ってしまう。途中読み

聞かせを入れた方が子どもたちも一息つけて良い。

共に支えあう狛江市の学校図書館

小学校は6年間あるのだから積み上げが大切だと考え、例えば図鑑の使い方を1～3年、年鑑の使い方を4～6年、と段階を追って指導。ワークシートをはさむファイルを一人ずつに。子ども達に資料を使いこなせる人になってほしい、学校図書館を学校教育と生涯教育の基盤にしたいと考えている。狛江市は、公共図書館の本と一緒に学校間の貸し出しの物流も確保されている。これによって学校間で公共図書館の本の取り合いはなくなった。文科省資源共有化モデル事業の地域指定が今年度で終わるので、来年から予算がなくなり、継続できるかが気がかり。

○11/24(金)13:35～16:30 狛江第6小学校にて研究発表 どなたでも参加できます。

参加者は大変興味深くお話を伺い、有意義な時間が過ごせました。町田とほぼ同じ頃学校図書館に人が配置された狛江市ですが、ずーっと先を歩んでいると感じました。学校司書臨時職員という立場で朝の打合せにも出席、学校運営の一員として役割を果たせていることがすばらしいと思います。専門・専任の「人」の配置の重要性をひしひしと感じました。(報告：市川博子)

狛江市立第3小学校図書館見学会

10月3日(火) 10時20分～ 14名参加

図書室は2教室をあわせてぐらいで蔵書も7000冊ほどで新しい本が多い。20分の中休みに生徒が大勢返却・借りにきた。秋の読書月間が始まって、今回は校長先生や事務の方にも交代で読み聞かせをしてもらうことになっている。この日は事務の方が「むくどりのゆめ」を読み聞かせ。絨毯に2,30人の児童が座って真剣に聞き入っていた。学校を挙げての取り組みということがよく感じられた。続いての授業は4年生の「国語辞典の使い方」でSLAのワークシートを使う。一人ずつのファイルには調べ学習関連のプリントやワークシートが閉じこんである。学年をおっての図書館利用指導カリキュラムが作られていて、それに則ってしっかりと進められていることがよくわ

かる。

講演会「フィンランドの教育と図書館」

9月30日(土)午後2時から川崎市中小企業婦人会館にて「生きた学校図書館をめざす会」主催の

『競争やめたら学力世界一』の著者・福田誠治氏の講演を聞いてきました。フィンランドとちょっと口走った為にここ1年、フィンランド関連の講演会に50回も引っ張り出されて生活がすっかり変わってしまったとか。ここ20年フィンランドは大きく教育政策の舵を切りなおし、1)評価はするが競争はしない、させない、2)学校と先生に全幅の信頼を置き、ほぼ全ての権限を与える、3)支援を必要とする生徒に最も手厚い支援をする(外国からの移民、障害をもつ子ども、家庭環境に恵まれないために学力が十分でない子どもなど)、4)教育に予算をかける、余った国家予算はすべて教育につぎ込む・・・などの特徴があります。公教育がほとんどどこも同じレベルで達成されているため、親や子どもに「いい学校へ行く」という考えがまったくない。また「できる子はいいの、放っておいて、だってできるんだから。できない子をきちんと支援する」というスタンスが徹底している。統合教室で、いわゆる到達度別の編成は一切行われていないが、その代わりつまづいている子にはすぐ別プログラムによる支援があり、補助教員も十分いる。中学でも1クラス16人といたった少人数。外国語などはそれをさらに2つに分ける。福田さんが見学した小1年のクラスは12人、まともに先生の話聞いているのは5・6人で、お喋りしている子もいれば机の下にもぐってかくれんぼしている子すらも！それでもあまり注意はしない。子どもたちや親には、勉強するのは自分の為ということがしっかりとしみついていて、自覚が高まればいやがおうでも自分から勉強するようになるということ、そしてそうなった時にはしっかりと支援する体制が整っている。

この背景には、ヨーロッパがもはや実質的に国境などない、列車でも何でも人や物が縦横に行ったり来たりする時代になって、これからの時代を生きていくためには一体どういう学力が必要かを真剣に考え、それを測るためにこのPISAの学

力テストが生まれた事情がある。この学力テストにはメディア・リテラシーを踏まえた設問も多く含まれている。

さてそんなフィンランド、学校にはほとんど図書室らしきものはない、なぜなら子どもたちは（先生も）午後の2時ごろには授業が終わって帰ってしまうから。そのあと学校はスポーツや音楽などの子どものためのカルチャースクールのように利用される。図書館は公立の図書館がいたるところにあり、それが児童館のような機能で、子どもたちは本を読んだり遊んだり自由にできる。とりたてて授業に本を使うという話はなかったが、そもそも授業そのものが決まった教科書ではなく、教材もすべて先生に任されている。本が必要なら近くの公立図書館からいくらかでも借りられる、ということのよう。以上おおまかな報告ですが、興味を持った方はぜひ本をお読みください。

（水越）

講演会「東京都政の教育と

その周辺にかかわること」を聞いて

10月7日（土）午後1時半から 国分寺労政会館にて。講師：広瀬恒子氏／主催：多摩地域学校図書館職員会

石原都政の「東京から変えます 日本の教育」という謳い文句で明らかになってきている東京都の教育行政の問題点を。「心の東京革命」のなかに「読書推進」が位置づけられている現状、これには驚きとともにおおきな危機感も感じる。「新しい歴史教科書」の採択を現場の教員ではなく教育委員会主体で決めるよう指示— 実際には杉並区と都立一貫校一校のみ採用。都立七尾養護学校から始まった性教育パッシング、これが少しずつ各市町村教育委員会に下りてきていて、実際性教育関連の本を棚から撤去する（自粛する？）学校図書館も出てきていると聞く。

入学卒業式での国旗・君が代の強制については、つい先ごろ地裁での違憲判決が出たが、当然控訴するだろうから予断を許さない状況にある。人事考課制度の導入などに、学校教育が厳しい評価と競争にさらされている実態。また国政レベルでは「早寝早起き朝ごはん」の取り組み、しかし親の労働条件・勤務形態の多様さや厳しさを省みずに一律に言うことは、格差の広

がりに繋がるのではないかと懸念も。安倍首相の「教育再生会議」の発足— 具体案として学校選択制、学校評議会による評価、教育バウチャー制の導入などがあがっている、また公立・私立ともに予算を共通に扱うとの話も。ますます格差が広がるのではないか。更に一番問題なのが「教育基本法」改正の動き。

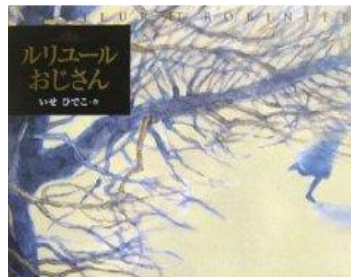
H15年の子ども読書推進会議での読書調査によると東京の学校図書館利用状況は総じて高い、ただし人がいる・いないの区別なく調査・統計を出しているため問題が見えづらい。都政は学校図書館にまったく意識が向いておらず予算をつけるつもりもない。各自治体の予算で独自に取り組むようにという考え。

こうした中で喜ばしいニュースとしては、日野市での「専門・専任・正規」学校図書館職員の請願採択があり、今後を見守りたい。データベース化するために新しく2000冊を共通のリストから選定し他は廃棄するという大田区での共通選書の指示については、いち早く先生方から問題点を指摘する声があがり修正された。子どもの本と図書館に関心のある教員の存在がなければ通ってしまったのではないか。

以上簡単な報告ですが、お話を伺いあらためて子どもたちを取り巻く状況、特に教育が大きな曲がり角・分岐点に来ていることを実感しました。前述のフィンランドとはまさに正反対の方向です。学校図書館関係者だけでなく教育に関心のあるすべての人が手を携え、教育のあり方を真剣に考え、この国のゆくえを見据えていきたいと思いました。

最後に『バスラの図書館員』（J・ウィンター/晶文社）と『ルリユールおじさん』（いせひでこ/理論社）が紹介され、本を命賭けで守る人、本を愛情込めて作る人の情熱に魅せられました。

（水越）





ひろば

21日(木) 13:00~16:30
会報No.,113の折込作業~例会
於・中央図書館中集会室

出席 伊藤 片岡 川野 久保 小林
島尻 前島 増山 丸岡 桃澤

○会報について

・巻頭言は、力丸世一さんに書いてもらう。「身近に図書館がほしい福岡市民の会」は今年6月、『お~い図書館！一市民による図書館運動10年の記録一』を上梓された。

○会の在り方を考える

・図書館関係の情報拠点として/運動体として
・館側との情報交換をしっかりしていく

○すすめる会より館長に要望書を提出する

・今話題の「特設コーナー」を設置して欲しいということ。今回は具体的に、「憲法・教育基本法」関連の資料コーナーを要望する。片岡さんがたたき台を作り連名で次回例会日に出すことに。

こうした市民の要望などは、図書館が委託化されていないから可能であり、図書館の特徴を出すことで図書館も評価させることにつながる。

○「白バラ」のパネル展開催について

・資金、仕事分担等について、次回にもう少し見える形にして再提案してもらうことに。

○市職労との共催講演会について

・講師に前川恒夫氏を希望。期日は1月20日(土)ではどうか。担当は、小林、久保。次回決定する。

○その他

- ・伊藤真さんの憲法の話(全号参照)について/感動した、説得力ある話し方、本人の人間的魅力など、参加した方より多くの感想が出された。
- ・和光大で開かれていた「水俣展」は、とても良かった。加藤登紀子さんの話を聞いたが、メッセージがはっきりしていて素晴らしかった(K)
- ・本紹介『悪魔のささやき』(加賀乙彦)。日本人は流されやすい。ノーといえないのはダメ。(K)
- ・図書館おはなしボランティアは個人登録の人が多く、図書館がボランティアを掌握できていないのが実状。どの団体にも属せず、研修する母体を持たない個人ボランティアの実態をどう考えているのか疑問。

図書館協議会の動き

- ・2008年度開設予定の病院患者図書館に一般財源の予算なしという措置に対して、市長、教育長に要望書を提出、面談を申し入れる事に。

第21回のづた丘の上秋まつり

11月3日(祝)一雨天の場合は5日(日)一
10:00~15:30/野津田公園ヤマナラシ広場
19の団体が参加。自然の中で見たり聞いたり
作ったり食べたり、ぼ~としたりして..遊ぶ。
14:30~焚き火を囲んでアイヌのお話と歌。
毎年、すすめる会も参加、まちだ語り手の会も
絵本を読んだり紙芝居をしたり...。
深まり行く秋の一日、ロハのひと時を!
(問:野津田・雑木林の会・久保 045-961-5045)

○次回例会は11月30日(木)、12月21日(木)。

- 「子どもと本連続講座」P2,5,6参照。

お知らせ

●「作家&語り手 宮川ひろさんの語りのひととき」

12月9日(土)13:30~15:00/町田市民フォーラム
和室/500円/直接会場へ

「おはなし会 記憶の風景ーあの日、あのときー」11月9日(木)15:30~17:30/杜舞人 とまと(コメント会館2F)/望木祐子、税所紀子、西村敦子の語り/飲み物+手作りケーキ付 1000円/30名

主催:まちだ語り手の会・事務局 042-795-3022

●第21回「町田子どもフェスティバル」/11月19日(日)10:00~15:00/本町田東小で一日さまざまイベント。和室:お話会/ご家族づれでどうぞ

●第13回きぬた図書館まつり・11月4日(土)~5日(日)/5日(日)10:30~12:00講演会「絵本の扉をひらいたら」絵本作りのエピソード/講師:浜田桂子さん(絵本作家)/砧図書館地下1F(問:03-3482-2271)

●平成18年度学校図書館支援事業第6回講演会「作家 たつみや章さんと語ろう“学校図書館に人がいるということ”」/11月26日(日)13:30~/八王子労政会館ホール/1000円/八王子に学校図書館を育てる会事務局 ☎&Fax 042-635-7756 篠原

●神奈川学校図書館大交流会/12月2日(土)12:30~16:30/講演:「書店から見る子どもの本の動向」・土屋智子氏(ナルニア国店长)、実践報告:厚木市の学校図書館(問:実行委員会 045-303-5096)

あとがき

秋を迎えて学校でのおはなし会が増え学校に向く機会が多くなった。授業内でのお話会は全ての子どもが対象。お話を聞く子どもたちの様子を見ていると、高学年になるにつれて覇気がなくなる。生きていて楽しいの?と声をかけたくなるような子もいる。そんな子も、ふっと物語の世界で心を遊ばせることで元気を取り戻すのかいい顔になる。その目を見たくて語り続けている。(M⁴)